

8. 限界突破キャンプ担当者から

ふりかえりカードの活用

企画指導専門職 小倉 祐司

キャンプでは、7泊8日のキャンプを通して、自ら「挑戦」する心・仲間と「協力」する心・相手を思いやる「感謝」の心を身につけてほしいという願いから、「挑戦・協力・感謝」というテーマを掲げました。そして、常に「挑戦・協力・感謝」を意識しながら、毎日過ごすべく、ふりかえりカードにも、この3つのことを振り返ることができるように工夫をしました。振り返りの時間も、じっくりと自分と向き合えるように、十分な時間を取っていき、また振り返りから、翌日にはどんなことを心掛けていったらよいのか、明日のめあても立てるようにしました。参加者それぞれが、毎日振り返りをする中で、自分の課題とめあて達成をしっかりと受け止め、そして日々たくましく成長していく姿がありました。振り返りの重要性を改めて感じるキャンプとなりました。

ボランティアとのかかわり、そして課題と方策

企画指導専門職 田村 文明

全日程を班付きリーダーとして参加したボランティアは3名、5日目からサポートスタッフとして1名参加という少人数での体制でした。少数でしたが、ボランティア事前研修（1泊2日）や参加者との事前キャンプ（1泊2日）を経験したことで、キャンプに必要な知識や技術等を学んだり、子供達とかかわったりしたことで、本キャンプへ向けての心と体の準備を十分に行うことができました。本キャンプでは、毎日スタッフミーティングを行い、子供達一人一人の心と体の変化や状況等について情報共有を図ることで、翌日のかかわりに活かしました。

課題は、「人手不足」です。開催時期が、大学の授業との兼ね合いで参加できる学生が限られていました。施設側の問題もあることから、大学側に合わせることは難しいです。

方策は、「ボランティアコーディネーターとの連携」です。日程や内容等が決まり次第、早めに募集案内をボランティアコーディネーターから周知してもらうとともに、ボランティア経験有の人材情報を関係者（職員、研修指導員等）からピックアップしておくことが必要であると考えます。

食事のサポートと課題

事業推進係 渡邊 あゆみ

キャンプ中に大切にしたことは「食事」です。交流の家から榛名山へ向かう道のりは炎天下で長距離の公道移動ということで、山道以上に子供たちの体力が消耗されることは間違いありませんでした。途中の休憩スポットではスイカを提供して、熱中症予防をし、榛東村キャンプ場では、疲労回復や消化を助ける効果がある食材を使い、子供たちが食べやすいメニューにしました。

子供たちは休息日の自炊で、朝失敗してしまっても「どうすれば上手くいくか」を班で考え、お昼には改善できるよう工夫をしており、とても良かったと思います。撤収に関しては、「立つ鳥跡を濁さず」ではありませんが、使った場所やモノに「感謝」をする意味でもテント片付けを最後までする時間、ゴミ拾い等をする時間を含めたプログラム内容に改善する必要があると感じました。